筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学体育系紀要

第 36 巻

The Bulletin of Faculty of Health and Sport Sciences

Vol.36

「筑波大学体育系紀要」寄稿規定

（平成 24 年 11 月 15 日）
平成 24 年度体育系紀要・研究業績集編集委員会

Ⅰ　規定（和文および欧文）

１．筆頭著者

本誌に寄稿できる論文の筆頭著者は、本学に属する以下の身分の者である。

（a）体育系の教員（特任助教を含む）、研究員
（b）体育系教員の指導を受けている人間総合科学研究科在籍の後期課程院生
（c）体育系教員の指導を受けた後期課程修了または単位取得退学した研究生
（d）その他紀要・研究業績集編集委員会が認めた者

２．寄稿内容

寄稿内容は、体育系関連分野における総説、原著論文、実践研究、研究資料、特集、報告とし、完結したものに限る（後述の（付記）参照）。

３．原稿の採択

原稿の採択は、紀要･研究業績集編集委員会において決定する。総説、原著論文、実践研究、および研究資料の審査にあたっては、紀要・研究業績集編集委員会が原則として本学体育系の２名の教員に査読を依頼する。なお、専門領域上、適切な査読者がいないと判断された場合には、外部者に査読を依頼することができる。

４．寄稿の依頼

総説、特集、報告に関しては、紀要･研究業績集編集委員会が寄稿を依頼することができる。依頼原稿には査読を行わない。

５．発行回数

本誌の発行回数は、原則として年１回とする。原稿の提出時期および発行時期は、紀要・研究業績集編集委員会において決定する。

６．著作権

本誌に掲載される著作物の著作権は、掲載にあたり体育系紀要・研究業績集編集委員会に帰属することを前提とする。

７．投稿方法

投稿は、以下のいずれかの方法で行う。

a. 体育系紀要・研究業績集編集委員会に直接あるいは郵送による提出

寄稿論文は Microsoft Word を使用して作成する。文字の大きさは 12 ポイント、「、」と「。」を使用。ダブルスペースで１ページあたり 18 ～ 20 行、ページ番号を付すこと。和文では明朝体、英文では times あるいは century のフォントを使用すること。

・題目、要約、本文

最初のページには、寄稿内容の種別（総説、原著論文、実践研究、研究資料、特集、報告）、分冊希望の有無、題目（和文および欧文）、著者名（和文およびローマ字）、本学体育系外の著者の所属機関名（和文および欧文）、代表者の連絡先（氏名、所属、住所、メールアドレス）を記す。２ページ目には、和文あるいは欧文のいずれの場合でも、英文で 200 ～ 250words の”Abstract”を記す（報告のみ不要。和文による「要約」は不要）。また、報告を除くいずれの寄稿原稿においても和文の場合は和文、欧文の場合は英語で３～５語のキーワードを記す。本文は３ページ目から開始し、各図表の挿入箇所を＜図１＞、<table1> のように示すこと。

Microsoft Word を使用して作成した題目、要約、本文は、任意のファイル名で CD-R に記録したもの（１枚）、さらにそのファイルを A4 版用紙に印刷したもの（オリジナル１部、コピー３部）を提出する。

・図表（原則としてモノクロ印刷）

図（写真）：GIF あるいは JPEG のファイル形式で作成し（解像度は原則として 300dpi（dot per inch）以上とする）、”図 1”、”図 2”あるいは”fig1”、”fig2-a”、”fig2-b”のように図番号がわかるファイル名とした上で、本文を記録した CD-R に共に記録する。図のキャプションは、Microsoft Word を使用してまとめて 1 つのファイルとして作成し、”fig-captions”のファイル名で同様に CD-R に記録する。図は別途、図ごとに A4 版用紙にキャプションと共にプリントアウトしたものを各 4 部提出する。

表：Microsoft Word を使用してキャプションも含めて作成し、”表 1”、”表 2”あるいは”table1”、”table2”のように表番号がわかるファイル名とした上で、本文を記録した CD-R に共に記録する。表は別途、表ごとに A4 版用紙にプリントアウトしたものを各 4 部提出する。

b. 電子メールの添付ファイルによる提出

寄稿論文は Microsoft Word を使用して作成する。文字の大きさは 12 ポイント、「、」と「。」を使用。ダブルスペースで１ページあたり 18 ～ 20 行、ページ番号を付すこと。和文では明朝体、英文では times あるいは century のフォントを使用すること。

・題目、要約、本文

最初のページには、寄稿内容の種別（総説、原著論文、実践研究、研究資料、特集、報告）、分冊希望の有無、題目（和文および欧文）、著者名（和文およびローマ字）、本学体育系外の著者の所属機関名（和文および欧文）、代表者の連絡先（氏名、所属、住所、メールアドレス）を記す。２ページ目には、原著論文では、和文あるいは英文のいずれの場合でも、英文で 200 ～ 250words の”Abstract”を記す（和文による「要約」は不要）。総説、実践研究、研究資料、特集、報告では、和文あるいは英文のいずれの場合でも、英文で 250words 以内の”Abstract”を記す（和文による「要約」は不要）。また、いずれの寄稿原稿においても和文の場合は和文、欧文の場合は英語で３～５語のキーワードを記す。本文は３ページ目から開始し、各図表の挿入箇所を＜図１＞、<table1> のように示すこと。

Microsoft Word を使用して作成した題目、要約、本文は、任意のファイル名で記録したものを下記の電子メールアドレスに添付ファイルとして送付する。

・図表（原則としてモノクロ印刷）

図（写真）：GIF あるいは JPEG のファイル形式で作成し（解像度は原則として 300dpi（dot per inch）以上とする）、”図

1”、”図2”あるいは”fig1”、”fig2-a”、”fig2-b”のように図番号がわかるファイル名で記録したものと、別途、すべての図のキャプションをまとめてMicrosoft Wordを使用して”figcaptions”のファイル名で作成したファイルを下記の電子メールアドレスに添付ファイルとして送付する。

表：Microsoft Wordを使用してキャプションも含めて作成し、”表1”、”表2”あるいは”table1”、”table2”のように表番号がわかるファイル名で記録したものを下記の電子メールアドレスに添付ファイルとして送付する。

原稿提出先電子メールアドレス：henshuu@taiiku.tsukuba.ac.jp

（紀要・研究業績集編集委員会宛）

８．原稿枚数の制限

原稿枚数は、1編につき図表も含めて刷り上がり10ページ以内とする（和文文字数で図表を除き約18,000文字、英文で図表を除き約6,000words）。ただし、研究資料に関しては、原則として、枚数制限無しとする。

９．引用文献

（1）引用文献は、原則として著者名のアルファベット順に通し番号をつけ、本文の最後に一括する。

（2）本文中での引用方法は、引用箇所の後に1,2,8,10-14）のように、該当する文献番号を肩字でつけることとする。

例１　……という成績を報告している1,3,10）。

例２　最近の縦断的研究成果5-7,9,12-15）によると……

例３　先行研究では、Jones5）や山田25）が、……

（3）引用文献の記載要領は、原則として単行本の場合には、著者、西暦年号（カッコに入れる）、書名、発行社名、発行場所、ページ数（開始ページ－終了ページ）の順に、著者が複数で編集者がいる単行本やプロシーディングなどの場合には、著者名、題名に続けて、和文では、（編）の後に編集者名を、そして「　」内に書名を、欧文では、（Ed.）の後に編集者名を、そして（In）の後に書名を記載する。雑誌の場合には、著者名、西暦年号（カッコに入れる）、題目、雑誌名、巻数、ページ数（開始ページ－終了ページ）の順とする。著者名のイニシャル、雑誌略称の後には原則としてピリオドをつけない。

・単行本やプロシーディングの場合

例１　奥田拓道（1984）：肥満．化学同人，京都，22-29.

例２　American College of Sports Medicine (1986): Guidelines for Exercise Testing and Prescription. Lea & Febiger, Philadelphia, 53-71.

例３　若林満（1982）：組織開発とキャリア開発．（編）二村敏子ら「組織の中の人間行動」，有斐堂，東京，318-333.

例４　Atal BS (1989): Speech coding and human speech perception. (Ed.) Elsendoorn BAG and Bouma H (In) Working Models of Human Perception. Academic Press, London, 101-125.

・雑誌論文の場合

例１　松浦義行（1990）：中・高年期における体力低下傾向の検討．筑波大学体育科学系紀要13：195-205.

例２　Taylor HL, Buskirk E, and Henschel A (1979): Maximal oxygen intake as an objective measure of cardio-respiratory performance. J Appl Physiol 8 : 73-80.

10.「注」について

注をつける場合は、本文中のその箇所の右肩上に、注１），注２）のように通し番号をつけ、本文の末尾と引用文献の間に一括して番号順に記載する。脚注にするか、本文中の段落間、あるいは章末に記載してもよい。

11. 欧文による投稿の場合の推奨事項

欧文で投稿する場合には、事前にネイティブスピーカーによる内容のチェックを受けることが望ましい。

12. 校正

印刷の校正は２回行い、初校は著者校正、第二校は紀要・研究業績集編集委員会が行う。

13. 別刷

別刷は、50部までは紀要・研究業績集編集委員会の予算で負担し、それを越える分は，筆頭著者が負担する。

Ⅱ　（付記）　寄稿原稿の種類（「体育学研究」寄稿の手引きを改変）

１．「総説」は、特定の研究領域に関する主要な文献内容の総覧、あるいは特定の領域で寄稿者が行った研究の概説・集大成などであるが、その記述は単なる羅列でなく、特定の視点に基づく体系的なまとまりを持つことが必要である。また、体育系関連諸分野における国内外の研究動向の紹介、評論、研究上の疑問や、あるいはこれまでの研究論文に対する批評や疑問を基にした重要な仮説・問題提起なども総説に含める。必ずしもその妥当性が検証されている必要はないが、十分に論理的であり、その仮説の組み入れによる研究・実践上の有効性、および追試等による立証の可能性が期待されるものであることが望まれる。論文の構成や見出し語は、内容に応じて適切なものを用いる。

なお、総説は、紀要・研究業績集編集委員会が寄稿を依頼することがある。この「依頼総説」には査読を行わない。

２．「原著論文」は、科学論文としての内容と体裁を整えているもので、未発表のデータに基づき、新たな科学的な知見をもたらすものであることが必要である。論文の構成は、問題提起、目的、方法、結果、考察、結論、文献、英文抄録の各部分から成り立っていることが必要である。ただし、人文系、社会系、自然系では論文構成にちがいがあるので、論文の構成や見出し語はそれぞれの研究領域に応じて適切なものを用いる。

３．「実践研究」は、体育系関連分野の実践現場からの貴重な情報をもとにした研究で、たとえば指導法に関する実用的研究や、スポーツ選手を事例的に分析した研究などが含まれる。論文の構成は、「原著論文」に準じる。

４．「研究資料」は、調査や実験の結果を主体にした報告であり、客観的な資料として価値を認められるものである。この場合、２の原著論文に必要な見出し語や、それに相当する内容のすべてを含む必要はないが、先行関連研究とのつながりのなかで、その資料を提供することの意味が明らかにされ、資料そのものの説明が十分になされていることが必要である。論文の構成は、「原著論文」に準じる。

５．「特集」は、紀要・研究業績集編集委員会が適切と判断した特定の内容に関する寄稿を、本学体育系の教員（特任助教を含む）、および紀要・研究業績集編集委員会が認めた者に依頼する。

６．「報告」は学内・体育系内からの研究助成（河本体育科学奨励賞、栗原基金研究助成、学内プロジェクト、学系内プロジェクト）を受けた研究について、その内容を簡潔にとりまとめたものである。研究助成を受けたプロジェクトの研究代表者に紀要・研究業績集編集委員会が寄稿を依頼する。

平成 24 年度　筑波大学体育系紀要・研究業績集編集委員会

委員長　足立和隆
委　員　澤江幸則　高橋義雄　武田　文　寺山由美
増地克之　安藤邦彬　緒形ひとみ　桑原鉄平
鈴木耕太郎　松畑尚子

筑波大学体育系紀要　第 36 巻　2013 年
The Bulletin of Faculty of Health and Sport Sciences , University of Tsukuba, Vol.36, 2013

2013 年 3 月　発行

発行者　筑波大学体育系　中　川　昭
茨城県つくば市天王台 1-1-1（〒305-8574）
NAKAGAWA Akira
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba
1-1, Tennodai 1 chome, Tsukuba-shi, Ibaraki-ken, 305-8574 Japan
印刷所　株式会社イセブ　茨城県つくば市天久保 2-11-20

筑波大学体育系紀要
第 36 巻
目　次

【巻頭寄稿】

・筑波大学陸上競技部　関東インカレ女子 20 連覇の背景　大山下圭悟 1

【総説】

・自閉症スペクトラム障害児の運動特性と指導法に関する研究動向　村上祐介 5
・国際協力とスポーツ：国際政治学におけるソフト・パワーとしての役割を中心として　柏木志保 15
・スポーツ現場におけるノロウイルスの集団感染　鈴木耕太郎、ほか 21

【原著論文】

・「プロスポーツ」の概念的考察　高岡英気 35
・Arousal and Motivation after Conceding Costly Penalties in Case Studies from British Professional Rugby　Jonathan MELVILLE、ほか 49
・100mH レースにおけるモデルタッチダウンタイムの再検討：13.71s―14.59s の日本人競技者を対象として　宮代賢治、ほか 59

【研究資料】

・聴覚特別支援学校在籍児の身体活動量と体力・運動能力との関連性　齊藤まゆみ、ほか 69
・Lactate Production and Clearance During High Intensity Swimming Test in Elite Water-polo Players　TAKAGI Hideki、ほか 77
・Kinect^{TM} を使用した動作計測におけるキャリブレーション法の開発と歩行パラメータ計測への応用　足立和隆、ほか 85
・宇宙環境での $\dot{V}O_{2max}$ 低下を抑制するための運動プログラム　松尾知明、ほか 93

【プロジェクト報告】

・J リーグ観戦者の観戦行動に関する研究　―観戦時の同伴者数の規模に着目して―　岩村　聡 105
・グループ箱庭体験による対話的競技体験への変化が競技力向上に及ぼす影響　江田香織、ほか 111
・フリークライミング授業が大学生の信頼感に及ぼす影響　渡邉　仁 121
・棒下宙返り〈引き手〉技術の新しい習得方法に関する発生運動学的考察　斎藤　卓 125
・クロール泳におけるプル動作とキック動作時の酸素摂取動態の比較　仙石泰雄、ほか 129
・ストリームライン姿勢時における頭部位置の違いが泳パフォーマンスに及ぼす影響　安藤邦彬、ほか 133
・長距離選手のランニングエコノミーに影響を及ぼす体力および技術的要因の検討　榎本靖士 137
・陸上中距離走における疲労状態で走速度を維持するための疾走技術　門野洋介 141
・アメリカンフットボールの装具が走力へ及ぼす影響　福田　崇、ほか 145
・大学柔道選手における鼻腔内黄色ブドウ球菌の保菌状況　鈴木耕太郎、ほか 149
・男子大学生バドミントン選手における漸増負荷テストに対する呼吸循環応答　吹田真士、ほか 157
・幼児の自発的な動きを引き出す遊具に関する事例研究～多様な用具特性を持つバランス遊具「ビリボ」に着目して～　古屋朝映子 161
・超音波 Real-Time Tissue Elastography を用いた筋および腱の硬さと運動パフォーマンスの関係　廣野準一、ほか 165
・膝関節角度と等尺性股関節伸展運動時におけるハムストリングスの筋活動量の関係　山元勇樹、ほか 169
・食事介入が睡眠時エネルギー代謝に及ぼす影響　―時系列解析を用いた検討―　緒形ひとみ、ほか 173
・運動により生じる酸化ストレスに対する抗酸化物質リコピン摂取の効果　麻見直美、ほか 177

The Bulletin of Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, Vol.36, 2013

筑波大学体育系　紀要・研究業績集編集委員会